

震

動

発行人 金沢真宗学院
代表者 高 桑 敬 和
金沢市安江町 15-52
金沢教務所内
電話 076-265-5191

第 32 号

目の前の現実に戻る

スタートラインに立ち続ける歩み

金沢真宗学院 前指導主任 大窪 康充

「こつちには日常がある、これから現実に帰るね……。」

地震による避難生活が続く親戚寺院の坊守が、当寺で一時を過ごした後、帰り際にふと口をついて出てきたことばでした。能登の自坊は大規模半壊。楽しく過ごした当寺での一時と、被災した自坊に戻らなければならないギャップから、落ち込む自分を必死に取り戻そうとすることばのように感じました。

教師資格を取得し、私自身の教師像を振りかえれば、常に理想を求めてきたように思います。「御門徒にきちんと真宗の教えを伝えたい」「人に感動を与える法話をしたい」等々、そこには何の迷いもありませんでした。しかし、その中身は、悩む御門徒に対して決まったマニュアルがあるかのごとくアドバイスをしたり、杓子定規にありきたりな教えを説くようなものでした。

このような態度を学院生には見抜かれていたようです。教科書に忠実に話したはずが、「それがどうしたの?」という反応だったり、仏教の流れを理論的に説明したつもりでも、「先生の話は何の感動もないわ」と言われる始末。自らの理想的な教師像を追い求めてきたことが、実は目の前の人をきちんと見ていなかったようでした。

真宗大谷派の教師として、そして一人の真宗門徒として歩むべき浄土への道は、自らの理想的なすがたを追い求めるこ

とはありません。願いが成就した理想の浄土に照らされる穢土、不安や不満がうず巻く現実にしつかり立ちなさいということです。

私自身、父親の介護は誤魔化しのきかない現実と向き合わざるを得ない課題でした。連れ合いや子どもと一緒に、父親の介護を続けた期間は、自らの理想像が見事に打ち碎かれるものであり、迷い戸惑うことばかりでした。ただその一方で、これまで苦悩してきた御門徒の声が微かに聞こえてきたのです。先日、ある御門徒に「あんた、本当に介護が大変やったんやね」と何気なく尋ねたとき、「やっとわかってくれる人がいた」と言わんばかりに、その方は涙を流したのです。そのすがたを目の当たりにして、「私が歩んできた道とは何だったのだろう」と、改めて立ち止まらざるを得なかったのです。「宗門のため」「御門徒のため」と言ってきた教化活動が、目の前にある現実の問題から逃げるための隠れ蓑になっていなかったらどうか。現実から理想を追い求めるのではなく、理想から現実の日常に立ち返り、誰もが苦悩を背負う深く、理想から現実の日常に立ち返り、誰もが苦悩を背負う深く、悲しみの中で、他者と共感してこそ自立できる教師像を、父親が身をもって教えてくれたのだと思います。これも父親を見送った今だから言えることで、介護の最中は愚痴ばかりの私でした。

一人ひとりの現実があります。時には当たり前と想っていた日常が送れない厳しい現実遭遇すること、被災者の方々から教えられます。親戚の坊守に対して、また目の前にいて苦悩している御門徒に対して、簡単にかける言葉が見つからなくなった自分がいる中で、教師として、そして人として、少しでも御門徒に寄り添いながら自らができることを行動に移せたらいいなあと感じています。これからがスタートラインに立ち続ける歩みの始まりです。

講師からの言葉

―特別講義を終えて―

「仏教の戦争」は、終わっていない

浄土正宗覚寺住職・大正大学招聘教授

鶴 飼 秀 徳

仏教教団における戦時協力の淵源は、明治維新です。神仏分離令という法律が出され、それまで混淆していた神と仏が分離しました。つまり国家神道の誕生です。

その結果、神仏分離令を拡大解釈した為政者や大衆によって、寺院の破壊が行われます。これがいわゆる「廃仏毀釈」です。廃仏毀釈で壊滅的なダメージを負った仏教界が、巻き返しを図るべく、国家に擦り寄っていきます。そして、金銭面、実装面で様々な協力をしていきます。

特に政府との連携では浄土真宗が先行します。政府の植民地政策に便乗する形で、国外に目を向けていきます。日清戦争以降の大陸侵略では、戦死者の弔いを突破口にしつつ、死におびえる兵士の心の拠り所として「従軍布教」を始めます。そのうち、植民地の最前線に寺を建立し始めます。これを「大陸開教」などと言い、たとえば浄土真宗本願寺派では、極東全体で四百近い寺院を建立しています。

日中戦争以降は、より主体的に戦争に関わるべく、宗教連合組織もできます。そして、これまでの従軍布教、従軍僧による戦闘への参加、慰

問、戦死者の弔いなどの規模は、従前の戦争の比ではないほど拡大します。

前線における布教や弔いは、兵士の士気を高め、死をも厭わず戦う決死隊を生む原動力にもなりました。死の恐怖を取り除き、お国のために戦って死んでいくことこそが極楽往生への道だと、従軍僧が説いたからです。

宗門トップは積極的に、権力や皇室に擦り寄り始めます。仏教にとって最も大事な依りどころである聖典も、「皇道仏教」の理屈に沿って改編されます。「日本仏教は天皇あつてこそである」「天皇は阿弥陀仏である」などと仏教教義の曲解がなされます。テロリストとなる僧侶も出現し、平然と「一殺多生」などと唱え始めたのです。

教団は、総力をあげて戦争に協力してきました。たとえば仏教系団体が献上した戦闘機は判明しているだけでも陸軍に三十機、海軍に二十一機の計五十一機です。真宗大谷派にいたっては、軍艦建造のための多額の資金を海軍に差し出し、また、宗門の子弟に対し、戦闘機パイロットの養成まで実施しています。

各地の寺院や門徒も、銃後運動に熱心でした。その最たるものが、金属供出です。おかげで各地の寺院から梵鐘や仏具が消えてしまった。今でも梵鐘のない寺院のほうが多数派です。

敗戦をきっかけにして、日本の宗教は解体的出直しを迫られます。国家神道は解体。仏教も国家神道を支える存在でしたから、GHQも戦後の仏教教団の扱いを慎重に検討します。

そしてGHQによる指導で農地開放が行われ、仏教界や神道界は大打撃を受けるのです。なぜ、GHQが寺院の農地を取り上げようとしたのか。GHQの対日宗教政策の責任者ウィリアム・パンスは、寺院を核としたムラ社会の解体を目指したのです。

それは閉鎖的なムラのコミュニティが、異口同音に天皇賛美、戦時協力を唱えたからです。その全体主義的ムラ社会の中心にあったのが寺院で、寺院とムラとを結びつけていたのは農地でした。その寺領農地がごとく、小作人に払い下げられることになったのです。

私はこの農地開放が、現代の「葬式仏教」をうんだ遠因になっていると考えています。農地を取り上げられ、経済力を削がれた寺院が、戦後熱心に墓地分譲や葬式に熱を入れ始めたからです。それが、「坊主丸儲け」などといった現在の仏教界への批判へとつながっていることは言うまでもないでしょう。

戦後は、「宗教の自由」が憲法で保障されました。すると、再び多くの宗教法人が誕生していきます。仏教の力が衰え、相対的に新宗教が勃興し、反社会的な動きを始めた例はオウム真理教事件が記憶に新しいところです。多額の献金や宗教二世問題で話題の、旧統一教会が入ってきたのも、この頃です。

敗戦、そしてその後の共産主義勢力の拡大。それに危機感を覚えた旧統一教会と安倍氏の祖父、岸信介元首相が「反共」で一致します。統一教会側にとっては願ったり叶ったりでした。最

高権力である総理大臣と接点ができると、それを利用しない手はない。戦前は戦争協力でしたが、今の時代は選挙協力ということでしょう。

結果的には、安倍元首相の狙撃事件という悲劇を招くことになりました。しかし、これも国家と宗教の長い歴史を俯瞰すれば、ひょっとして予測ができたことかもしれません。国家と宗教の距離が接近すれば結果的には、互いが崩壊することは歴史が証明しているのです。

キャンパスレポート

三年生 波佐谷 友幸

私は、お寺の生まれではありません。父親の実家が輪島のお寺でしたが、お寺とのつながりは、たまに金沢から遊びに行く程度でした。父親が晩年、住職を務めていましたが、二年半前に亡くなり、お寺の後継の問題から、葛藤の末、姉とともに金沢真宗学院に入学しました。入学前は、仙台にいましたが、姉だけに負担をかけられないという気持ちと、仏教を学んでみたいという気持ちもあり、金沢に二十数年ぶりに戻ってきました。

これまでの二年間で、真宗についてまだまだ多くを語れませんが、振り返ると入学式では、新入生入場の際、会場前方(御本尊)にはお辞儀をせず、(多分一人だけ)参列者にお辞儀をしていました。また、正信偈や和讃もどこをどう読むのかも分からず、隣の方に教えてもらったり

する有様だったので、少しは成長したのかなと感じます。

私は普段、人事の仕事をしていて、就職活動中の学生に偉そうに会社やキャリアについて話すこともあります。一方で、今の自分自身も仕事も学校も中途半端だと感じていて、どこに向かっているのか、分からなくなることもあります。授業での真宗の学びから、喜びを感じることもありますが、真宗は深く、道のりが遙か遠くに感じることもあります。以前、懇親会の場で指導の方から「会社で社会人として過ごしてきたからこそ、活かせる経験がある」とお話頂くことがあり、少し気持ちが楽になりました。「四十にして惑わず(論語)」からは程遠いですが、「仕事×真宗」の掛け算で、中途半端ながらも、自分なりの真宗との関わり方を模索していきたいです。

さて、今回の震災で、輪島の本堂は大きく破損し、御門徒の方々も被災されました。これから自坊や真宗とどう関わっていくのか、残り一年の中でも、指導や学院生の皆様からお知恵を頂きながら、考えていきたいと思っています。

三年生 赤城 暁子

私は、実家の跡継ぎ云々ではなく、浄土真宗に興味を持っているからという理由で真宗学院に通うことを決めました。大学院で宗教学を専攻していたこともあり、学問として外側から見た場合と、教義を踏まえ内側から見た場合とで、どのような違いがあるのか知りたいと思ったの

がきっかけでした。

学院に通い始めて一年ほどは、指導の先生方がたびたび口にする「問いを持つこと」という言葉に違和感を抱き続けていました。「私もまだはつきりとは掴めていないが、こうではないかと今は思う」「あなたはこう思いますか」「このような歯切れが悪いとも思える答え方に、「知りたかったことと違う」「欲しい答えが得られない」と寂然としない思いを抱いていました。

その印象が変化していった境は、ちょうど二年にあがってからだったように思います。曖昧とも取れる答え方の中には、学問の世界で慣れていた明確な一問一答の形式とは異なる良さがあると感じるようになりました。一年次の私は指導の先生方の言葉が「答え」であることを求めていましたが、授業などを通して、指導の先生方から提示されるものは「自分自身で答えを見出すための糸口の一つ」であると考えようになりました。

そして、今ではそのような糸口の一つを示すことが、時に誰かの悩みを解きほぐす一助になることがあると感じています。私の答えを聞いても物憂げな表情をしていた相手が、私の問いかけを通じて自分の中で迷いや悩みを咀嚼し、何らかの気付きを得た時、以前とは違う表情を見せることがあります。その表情を見て、これが「問い続ける」ことの良さの一つなのだろうと思うようになりました。残りの一年間で次は私は何に気付くことができるのか、今からとても楽しみにしています。

二年生 宮地 朋子

真宗学院に入学を志した理由の一つは、退職を機に自坊の手伝いをしようと思ったからです。コロナを機に大きく変わった寺をとりまく状況の中、何をしていけばよいか、自分はどうあればよいかを学びたかったのです。学院は生徒も先生方も、年齢をはじめ、現在置かれている寺や家庭の状況、考え方、みんな違います。多くの人と共に学ぶことで、一人では気づけなかったことに気づかされています。これから、この金沢真宗学院でお会いできた縁を大切にしていきたいと思っています。

もう一つの志願理由があります。私は在職中に高校で教員をしていた時、生徒が変わる瞬間というのを見てきました。それまで聞き流していた言葉が、ある時ふっと心に届くのです。何が生徒の心にその言葉を届けたのでしょうか。私にはそれが人の熱意とか、教育の力とかによるものではないと思われました。人を救うものが何か。その答えが浄土真宗の教えの中にあるのではないかと思ったのです。

学院の授業は、これまで一般の学校で学んできた学びとは大きく違っていました。入学当初の多くの授業で言われたのは「仏法の学びは、私が学ぶのではなく、私を学ぶのだ」「仏教の学びとは自己とは何かを学ぶことだ」ということでした。自分の外側にある知識や方法を学ぶだけでなく自分の内面を見つめていく授業は、そのたびに自分が拓かれていくような感覚があ

り、学院に行くのが楽しみでした。しかし、授業の具体的な内容となるとやはり難しく、いざ学年末レポートを書くとうすると一向に筆が進まず苦労しました。仏法の勉強は一生のものだと伺っています。これからまたゆまず学んでいきたいと思っています。

二年生 桂 正芳

金沢真宗学院で仏教を学ぶということで、入学してまず思ったことは、一般的な学問とは異なる視点でとらえていかなければならない、ということでした。そして、学院生の方々と共に学んでいく中で、絆を切に感じています。同じ志を持った人々が集い、境遇はそれぞれ違えども通じるものがあると思いました。

私は、今まで富山県、それもいわゆる呉西圏域といわれる西部地方の方々としか、ほぼお付き合いがなかったもので、県を越えて石川県や福井県の方々との出会いはとても新鮮でした。会話をしている言葉のイントネーションが違ったり、方言が混じったり、地域や文化の違いを感じます。私たちの学年は女性の方も多く、男性とは目線の違った意見が聞けることも、とても勉強になっています。

日々様々なことが初めての体験で、とまどいが多々あります。同じ授業を受けていても皆それぞれ解釈や受け止め方が違うことも興味深いことです。指導の先生方も丁寧な授業をしてくださっていて、内容自体は難解ですが、私自身向き合う意欲がでます。施設に関しても冷暖房

が完備されていて、ありがたいです。駐車場も広く、入口に受付の方も常駐しておられるので防犯的にも安心です。

学院での学びを進めるにつれ、常々思うのは、宗教とは自分が想像しているより、はるかに複雑で困難な事象なのだと感じます。しかしながら、いただいたすべてのご縁を大切に、日々精進していきたいです。そして、自分を見つめ、自分の応えを見つかけたいと思います。



卒業式勤行

真宗学院を卒業して

二〇三三年度卒業 柿原 覚耀

三年間を思い返してみると、仕事でお年寄りの介護をした後に一時間あまりかけて金沢まで通う生活が毎月二週間近く続くことがとても辛かったことを思い出します。仕事と学院生活の両立がとても大変でした。

私が真宗学院に入学した経緯ですが、両親に「寺に生まれたのだから、真宗を学んでほしい」と言われ、私としては仕方なくという形でした。そのような理由で、一、二年生の時は真宗を学ぼうという気持ちも全くなかったのですが、授業も疎かにしていませんでした。けれども、三年生になり、何となくですが少しずつ真宗に興味を持つようになり、学ばなければと思うようになりました。しかし、仏教用語を理解していない自分にとって、授業に出てくる専門用語はとても難しく、全く分からないこともありました。このような私ですが、共に学んだ仲間・指導の先生に三年間助けていただいたおかげで、無事卒業することができました。この仲間・指導の先生が居なかったら、恐らく三年間も真宗学院に通えていなかったと思います。改めて、感謝申しあげます。

真宗学院の三年間の学びを通して、私の寺院に対する関わり方や考え方に変化がありました。何よりも、聞法ということ、自分自身のためにも聞くことの大切さを学ぶことができたと思

います。ただ、卒業しただけの今の自分です。で、来年からは金沢真宗学院に聴講生としてあらためて通い、真宗の教えに出逢い、学びたいと思います。

二〇三三年度卒業 新田 唯菜

この春、真宗学院を卒業しました。三年間は長いと思っていましたが、過ぎてみればあっという間でした。学院は今まで経験してきた学びの場とは異なり、寄り合う人々の年齢や職業の幅広さが新鮮でした。在学中にはたくさんの方々から、様々なお話を聞くことができ、とても楽しかったです。ここでの経験は他では得られないものでした。この三年間で出会った皆さん、そして真宗学院に通うきっかけを与えてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。

真宗学院では、自己を見つめる大切さを学びました。漠然と、自分のことは自分が一番分かっていると思っていましたが、いざ情報を引き出そうとするとプロフィール的なことばかりで本質的なことは何も出てきませんでした。次第に、自分がどういう人間かと思い浮かぶことは、そうありたいという理想かもしれないとも思ひ始め、一番よく分かっていたつもりのことさえ分からなくなり、悩みました。

蓮如上人は「人のわるき事は能く能くみゆるなり。わがみのわるき事は、おぼえざるものなり。(中略)人の云う事をば、よく用すべし。わがわるき事は、おぼえざるものなる」(聖典 一〇六四)と仰っています。私には自分を客観視し、人

からの指摘を受け止める素直さが足りていなかったのかもしれない。また後期修練や一泊研修の中で、講師の兪漢子さんが繰り返し仰っていた「一番出遇わなければならない他者は自分



2023年度 金沢真宗学院卒業式 2024.3.21 (木) 金沢別院本堂

自身「一緒に生きていきましょう」という言葉がとても力強く、心に残っています。良いことばかりではなく、悪いことも含め、人間として生きるというこの問題を共有することで、相手を知り、自分を知ることができるのだと気づきました。

自分を誤魔化さず、常に問い続けることと人との関わり合いを大切にし、これからも教えを自分事として聞き続けたいと思います。まだまだ分からないことばかりで不安も多いですが、諸先輩方に教わりながら一歩ずつ丁寧に進んでいきます。素晴らしい三年間をありがとうございました。



金沢真宗学院特別講義 開催報告

各分野で活躍されている先生方が、指導や学院性に向け、専門的な知識を踏まえて丁寧にお話しされます。

講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。限られた文面では誤解や不都合を生じます。

ことがあるかと存じますが、学院卒業生をはじめ、皆様方に少しでも教えに触れていただきたく、このような形をもって紹介させていただきます。

2023年度 金沢真宗学院特別講義一覧

No	期 日	講師名	肩書・所属等	講 題・ 内 容	推 薦 者
1	2023年7月18日(火)	坂谷 学称	本願部堂衆	真宗本願における 年間行事について	富樫 慶吾
2	2023年7月28日(金)	鶴飼 秀徳	浄土宗正覚寺住職、 大正大学招聘教授、 東京農業大学・仏教 大学非常勤講師	なぜ明治維新は寺院を 破壊したのか ― 廃仏毀釈の全容に迫る ―	平野 慶之
3	2023年8月25日(金)	鶴飼 秀徳	浄土宗正覚寺住職、 大正大学招聘教授、 東京農業大学・仏教 大学非常勤講師	戦争と仏教 ― 権力に擦り寄った 僧侶たち ―	平野 慶之
4	2023年9月20日(水)	藤田 庄市	フォトジャーナリスト	カルトとは何か	平野 喜之
5	2023年9月29日(金)	杉田 真衣	東京都立大学准教授	困難を生きる人々と ともに在るには	永藁 知也
6	2023年10月18日(水)	近松 誉	本願部長	大谷派の儀式について	池崎 方子
7	2023年10月25日(水)	藤場 俊基	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義Ⅰ	細川 公英
8	2023年12月6日(水)	藤場 俊基	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義Ⅱ	細川 公英
9	2023年12月15日(金)	鶴見 晃	同朋大学教授	『歎異抄』撰述の背景 ― 初期教団を取り巻く 状況と思想	道上 清樹



真宗本廟における

年間行事について

坂谷 学称氏

今回の特別講義は、本山堂衆である坂谷学称氏に、真宗の行事について話をいただいた。

最初に、当派においては三経一論、浄土三部経、願生偈が勤まることで法要、それ以外は、本来、法会となると説明があった。

いくつかの行事の中で、元日の修正会では莊嚴や勤行の話を中心にしていた。併せて、一般化している除夜の鐘を本山では突かないことについて、その理由を煩惱を除くという教えがないからと説明いただいた。

彼岸会では、春秋の初日、中日、結願の年間六回、往生礼讃が勤まる。また、本山での毎月二十六日の親鸞聖人御命日では、伽陀五章、正信偈真四句目下、淘八、次第六首、私記嘆徳文を拝読する。別院では報恩講の時に勤まるが、本山では毎月二十八日に勤まるとのことであった。

坂谷氏は、当派の儀式は阿弥陀仏の説教せあり、僧侶自らが教えをいただき、阿弥陀仏の説教を「勤める」のではなく、「勤まってい」く「謙虚な心構えでお手伝いをさせていただくという気持ち」が大事であると結ばれた。

(安部 渉)



なぜ明治維新は寺院を

破壊したのか

― 廃仏毀釈の全容に迫る ―

鵜飼 秀徳氏

ジャーナリストで浄土宗の僧侶でもある鵜飼秀徳氏に、明治維新から太平洋戦争までの仏教教団の歩みを二回にわたってご講義いただいた。一回目の講義は明治初期におこった廃仏毀釈についてであった。

明治維新の指導者たちは新政府樹立にあたって、民族意識の統合をはかるため神権的絶対性を持った天皇を中心とする祭政一致の政治体制確立を目指した。新政府は神道を国家の中核に据えるべく、一八六八年に神仏分離令を布告する。それにより、それまで混淆としてあった仏教と神道は強引に引きはがされ、以後、仏教施設や仏像の破壊、仏教慣習の廃止などが強行される廃仏毀釈が各地に広がり始める。

この廃仏毀釈は、全国の寺院数が九万カ寺から四万五千カ寺に半減するほどの激しい排斥運動となり、多くの伽藍・仏像・仏具・經典が灰燼に帰した。首がなく、両腕をのがれた石仏、光背が切り落とされた阿弥陀如来像など、今もなお残るその痕跡をたどりながら、熾烈を極めた排斥の状況が伝えられた。

廃仏毀釈は全国的に展開され、日本人の宗教意識、またそれ以後の仏教教団と政治権力との関係においても多大な影響をもたらすこととな

った。

この神仏分離令は民衆の宗教生活のなかに必然性があったのではなく、近代国家形成のため権力によって外からもちこまれた政策であった。またあくまで神仏の分離をはかるものであり、過激な仏教排斥を勧めたものではなかった。にも関わらず、廃仏毀釈がこれほどまでに徹底して推進されていた理由はどこにあったのだろうか。

鵜飼氏は著書『仏教抹殺』の中で廃仏毀釈の要因に次の四つを挙げる。

- ① 権力者への付度
- ② 富国策のための寺院利用
- ③ 熱しやすく冷めやすい日本人の民族性
- ④ 僧侶の墮落



これらのうち、④僧侶の墮落については、講義の中でも松本にあった若澤寺（にげんじ）という寺院を例にあげて触れられていた。

幕藩体制下における寺請制度（てらうけいせいど）によって過剰な庇護を受けてきた僧侶の墮落ははなはだしく、人々の仏教界への失望は大きく膨らんでいた。そして新時代へと切り替わった瞬間に、鬱積していたエネルギーが暴発し仏教排斥の嵐が吹き荒れた。廃仏毀釈は政治権力によって引き起こされたものであったが、一面では排斥された仏教団側にもその因があったのではないかというのが氏の見解である。

(平野 慶之)



戦争と仏教

「権力に擦り寄った

僧侶たち」

鵜飼 秀徳氏

二回目となる鵜飼秀徳氏の講義は、明治から昭和にかけての仏教教団による戦争協力がテーマであった。

神仏分離令をはじめとする明治政府の宗教政策は、廃仏毀釈という仏教排斥運動となつて日本の宗教構造を大きく変えた。こうした中、真宗教団もまた明治政府との付き合い方を模索していく。明治初期からの政府への多額の献金、また北海道開拓への申し出など、新たな権力者に対して自らがその従属的立場にあることを示していった。

近代日本が戦争を重ね、大陸に進出していくとき、仏教教団もそれに伴うこととなった。中国・台湾・朝鮮の各所に寺院を建立し、布教の拠点とした。人々の精神的なよりどころとなる宗教施設が植民地に建てられることは、そこがすでに占領国側の主権が及ぶ土地であることを国際的に証明することでもあった。したがって、占領者がその地においてなすべきこととして自国の宗教施設の建設があり、その役割を仏教教団は積極的に担っていた。

時代が下るにつれ、教義が「皇道仏教」と称される天皇への忠孝を説く内容に変質し、寺院には天牌が奉安されるようになる。また全国の寺

院では梵鐘や金属製仏具が兵器製造のため供出され、各教団は競って戦闘機の献納を行い、真宗大谷派では軍艦建造のための巨額の献金がなされた。仏教教団はまさに国家と一体となって戦争に邁進していったのであった。

さて今回の講義の前提にある問いは、不殺生を教える根本におく仏教教団が、どうして凄惨な戦争に加担していったのか、ということであった。天皇と阿弥陀如来を同一の存在とし、皇国の為に身を賭して戦えと檄を飛ばす過去の教団のありさまを、現在の我々はどのように受けとめればよいのであろうか。

「そういう時代だから仕方がない」、そのような意見もあるかもしれない。しかし、時代状況によって教えの内容が様変わりする歴史を突きつけられた時、あらためて仏教の伝承ということを課題にせずにはいられない。仏教教団が、この世間の中にあつて、人々と共にあろうとするのなら、国家の在り方や社会の風潮からの影響を決して免れることはできない。もし今後、国家が戦争へと舵を切り、社会全体がそれを賛同する状況におかれたとき、今の仏教教団、そして私たち一人ひとりはどういう仏教を語るのであろうか。

(平野 慶之)



カルトとは何か

藤田 庄市氏

金沢真宗学院の特別講義の講師として東京から、長年にわたってカルト問題を取材してこられたフォトジャーナリストの藤田庄市氏をお招きして、二〇二三年九月二十日、金沢真宗会館ホールで「カルトとは何か」という講題でご講演いただいた。

まず、この藤田氏の講演の背景を説明しておこう。

一九九五年三月二十日にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起き、「カルトとは何か」ということに世間の関心が集まったが、時間が経つにつれ次第にカルトへの問題意識が遠ざかっていったように思う。しかし二〇二二年七月八日に、元首相である安倍晋三氏が山上徹也氏によって銃撃されるという事件が起こって以来、再びカルト問題に関心が集まるようになった。しかしこの事件はオウム真理教の信者たちがその宗教的信念によって起こした事件とまるで違い、山上氏の母親が世界平和統一家庭連合(旧統一教会)に入信していたことが原因で起こった事件である。山上氏自身は信者ではないが、親がカルト教団の信者であることなので、山上氏は「宗教二世」と呼ばれる存在である。実はこの事件が起こる以前から宗教二世たちが成長して大人になってその苦しみをSNSで発信していたのであるが、この事件をきっかけに非常に多

くの宗教二世たちが声を上げ始めたのである。

そのような背景から、藤田氏の講演は真宗会館ホールに集った全員で、まず宗教二世の声を聞くことから始まった。エホバ二世の詩人であるイーダビーの自作詩絶叫の動画「地獄」を参加者全員で観た。その後その動画を解説する形で藤田氏は、エホバの証人が「信教の自由」によって二世信者の人権を踏みにじっていること、「カルトと信教の自由」論の構築はいまだ手つかずのままであることを指摘された。

藤田氏の講演のあと、藤田氏が私に質問して私が答える形になった。私の高校の後輩であり、私が十年以上にわたって罪を償うことを支援してきたオウム元信者で、二〇一八年七月六日に死刑が執行された井上嘉浩氏について、藤田氏から私にいくつかの質問がなされた。その質問の中心は、井上嘉浩氏との交流を通して「カルトとは何か」という問題を私がどう考えているのかということだった。

藤田氏はカルト問題の本質を、スピリチュアル・アビュース(信仰虐待、霊的虐待)と押さえられている。神や仏への信仰を利用して、人を恐怖に陥れ、そのことによって信者を支配するという方法がスピリチュアル・アビュースであるが、私は支配される側にも服従欲というものがあるのではないかと、井上嘉浩氏との交流を通して感じたことを述べた。神や仏への信仰を媒介として支配欲と服従欲が結びつき、支配・被支配の関係に陥ったことがカルトであると思う。そのように藤田氏に答えた。

安倍氏銃撃事件からもう一年半以上が経つ。「カルトとは何か」という関心が世間から失われつつあるように感じるが、私はこれからも学び続けて行きたいと思った。

(平野 喜之)

困難を生きる人たちと
ともに在るには
杉田 真衣氏

本特別講義では東京都立大学の杉田真衣先生をお招きし、『困難を生きる人たちとともに在るには』というタイトルで講演をいただきました。

杉田先生は教育学が専門で、前任の金沢大学では大学教員という枠を超えて、ホームレスの方やセクシユアルマイノリティの方々、いわゆる社会的なマイノリティ(少数者)への支援活動に携わっておられました。その活動姿勢を知ってから、ぜひ真宗学院でもお話をいただきましたと願っております。

講演の中で、「私たちはすでに一緒に生きている」という言葉が印象に残っております。私たちの多くが、生活、職業、病气、障害に関する何らかの困難、困りごとを抱えているのではないのでしょうか。しかし他者の困難、困りごとは、目にしてわからないことがほとんどです。また大人にすれば大きな問題であっても、他者からすると小さな問題、もしくは問題とも受け取られる

ことがない場合もあります。私たちは、言葉にしてみらうと初めて他者の実情を知ることができそうです。

先生には、ある学生は自身がレズビアンであること、またある学生からは自身がトランスジェンダーであり大学のトイレを使ったことがないことを、卒業してから初めて教えてもらった経験があるそうです。学生時代は特に困難を抱えているように見えなくとも、実は大きな困難を抱えていたということです。それはつまり、すでに困難を抱えている他者と一緒に生きていたのに、それに気がつかなかったことでした。この経験をされた際、先生はご自身が研究者としてまだまだ学習をしきれていないと思われるそうです。



お寺に身をおき、生活させていただいておきますと、たまに自分はなんと狭い世界で生きているのだろうかと思うことがあります。ご門徒さんとしつかりとしたお付き合いが出来ていると思っけていても、実はその方の本当に願っていること、相談したいことに寄り添えていなかったことが多くあります。

杉田先生の講演を拝聴し、自分にとっての普通や当たり前を問い直し、他者とながることの大切さを改めて確認しました。

(永藁 知也)



大谷派の儀式について

近松 誉氏

十月十八日、本山本廟部長・定衆の近松誉氏を招き「大谷派の儀式について」という講題でお話をいただいた。

初めに自己紹介とともに、「なぜ、私が儀式を行わなければならないのか」という、ご自身の課題から「宗教と儀式」についてお話された。ネアデルタール人が死を悼むこと、生老病死を意識したことが宗教の生まれるきっかけとなったこと、人間に訪れる節目のたびに、その意味を問う機会が与えられることを儀式の「効能」として示された。

そして「真宗の儀式」は「浄土の莊嚴」であり、所作、装束、音声(おんじょう)、さらには教え

を求めて聴聞する衆生も「莊嚴」であるというお話が印象に残った。さらに人の手で行われる「お供え」に対して、大谷派では「お備え」という表現がなされることについて、私たちは仏の功德が表現されているお莊嚴のお手伝いをさせていただいている、ということを強調された。仏事や法要が「お勤まりになる」という表現も、その意味によるものである。

後半は本山の「御堂」について、建物の特徴や儀式の形が教えと深く結びついていることを述べられた。本山のご本尊と同じはたらきがあるという意味で、本山からお内仏のご本尊をお迎えするようにとの呼びかけがなされていることを改めて丁寧に教えていただいた。

(池崎 方子)



『教行信証』講義Ⅰ・Ⅱ

藤場 俊基氏

金沢真宗学院の特別講義(二〇二三年十月二十五日、十二月六日)において、昨年度に引き続き藤場俊基氏(金沢教区常讃寺住職)をお迎えし『教行信証』の講義をいただいた。

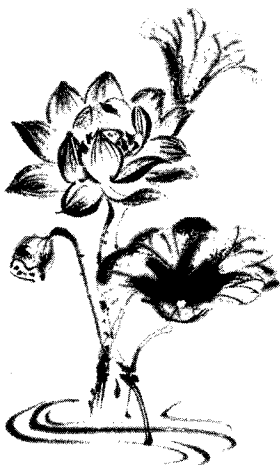
今回も先生より仏教を学ぶことの根本的な視点を教えていただいたように思う。それは、仏教の学びは問いを見つめる学びであり、相手に答えてもらうような問いは問いとはいわない。問いは思索の出発点であり、自分で考えるしか

ないということ。

私自身毎日の生活を通して「なぜ生きている実感、手応えがないのだろうか?」「なぜこうもすべてが空しく過ぎてゆくのだろうか?」という思いが内からでてくる。そのことと、先生が講義で必ずおっしゃる「お念仏申していますか?」と、私に対してお念仏をお勧めになり、さらに「なぜ南無阿弥陀仏なのか?」という問いかけは、じつに深いところで響き合っていることに気づかされる。

この問いの前に、ただ立ち尽くすしかない私である。私にとって南無阿弥陀仏がはつきりしないことがあらためて浮き彫りになってくる。それはわが身のこととして聞いていないからである。一方で私自身の生涯を通しての問い・課題をいただいたことが何よりも嬉しく思う。本年も、学院での先生の特別講義において、わが身が教えられ課題になるお言葉に出あえることを楽しみにしている。

(細川 公英)



『歎異抄』撰述の背景

「初期真宗教団を取り巻く

状況と思想」

鶴見 晃氏

講義は『歎異抄』が近現代で多く読まれているのはなぜか、という点の確認より始まった。それは、近代人が抱えた懊悩、即ち生きる意味を渴望したという点に始まるとする。それは、現代のバラバラで孤独な個人が、他者の眼差しに曝されながら、いかに生きるかという懊悩として通底している。『歎異抄』が求められるのは、そのような現代人に「同行行者」「一室の行者」という、呼びかけられている世界があるからだと言える。その世界は、より具体的には、弱さと悪に立脚した協同性を齎^{もたら}すものとして実働するが故に、多くの人々に求められるものであり、『歎異抄』が単なる歴史的書物ではなく、今日を生きる我々に必要な書物ということができると、この点を押さえられた。

その上で、唯円が当時課題としたものを見ていかれた。異義とは「真実の法を知識化したもの」であるという金子大栄師の教示を出され、それが二通りの流れを持つことを示された。一つには「字解を主とするもの」「本願を信じることを重視することによってなされる異義(十一・十二・十五・十七の各章)であり、もう一つが「制規を要とするもの」「念仏の実践を重視することによってなされる異義(十一・十三・十四・

十六・十八の各章)である。これらは、門徒集団が成立した中で、そのあるべき姿を求めるが故に異義が出てくるということである。その背景にあるのは、集団という問題だと言われる。集団を維持し、結束を高めるために、否応なく答えを求めることが始まる。正しい念仏者とはどのような在り方か。どのような形なら、往生浄土が間違いのないのか。そのような問題が、問いではなく、経論釈の文言や親鸞の言葉を盾に与つての論争となるということが生じる。

唯円は、そのような在り方を「歎異」する。正しい信仰・協議を考えることが大切なのはいうまでもない。しかし、正しさを求めることで、我々が答えの刃を振り回すことになってはいないか。ここに大切な課題がある。『歎異抄』は、観念的な書物ではなく、今、ここにある私自身の課題を照らす、具体的な書物であることを最後に確認された。

(道上 清樹)



卒業後の歩み

金沢真宗学院を卒業されてからの開法生活について、寄稿いただきました。

おばあちゃん、ごめんなさい

松原 智美

今から二十一年前、私が後期修練で研修道場にいた時、晨朝参拝で一人のおばあちゃんに出会いました。毎日一番前に座って合掌していらつしやる姿が、とても印象深かったことを覚えています。班担の先生に尋ねると、そのおばあちゃんは八年ほど前から、雨の日も風の日も一日も休まず、お参りにいらつしやっていると聞くことです。

修練最終日、私は思い切つて「おばあちゃん、毎日お参りにいらつしやって偉いですね。」と声を掛けてみました。すると、おばあちゃんからは、「何が偉いのですか。家の中で私の役割が終わったから、好きなことをさせてもらっているだけです。」と返事が返ってきました。「私がお嫁に来た時は、少しでも家に馴染むようにお義母さんにいろいろ教えてもらい、今度息子のお嫁さんには、自分がお義母さんに教えてもらったことを伝え、孫にお嫁さんが来てやつと私の役目は終わり、楽しみにしていたお参りができるようにになりました。」と続けられました。

おばあちゃんが幼い頃、お母さんは毎朝早く起きて朝食の準備をし、おばあちゃんの手を引いて近くのお寺にお参り行っていたそうです。だから、おばあちゃんは幼い頃から知らず知らずのうちに手を合わせる習慣が身に着いたそうです。それから、おばあちゃんは私に向かつて、「手を合わせる習慣は、幼い頃から身に着けることが大事です。それは、あなた達僧侶の方の仕事です。頑張ってくださいね。」と、笑顔で言われました。そんな事ぐらい容易いことだと思つた私は、「はい、分かりました。頑張ります。」といとも簡単に返事をしてしまいました。

それから数ヵ月後、真宗学院同窓会で真宗本廟奉仕団に行き、一人の教導さんに出会いました。そして、その教導さんが私たちに向かつて次の言葉を掛けられたのです。「学院を卒業して偉くなったと勘違いしていたら、真つ逆さまに落ちるだけです。」

あまりにも思いがけない言葉に、衝撃を受けました。そしてその時、初めて有頂天に舞い上がっている自分を思い知らされました。また、あの時おばあちゃんに軽はずみな返事をしてしまった自分にも、とても後悔しました。

おばあちゃんとの約束は、私にとって一生かけての課題です。奉仕団に行く度に、「おばあちゃん、ごめんなさい」と、今も手を合わせている私です。

移動研修会&一泊研修会

実施報告

金沢真宗学院では毎年テーマを設定し、三学年合同で二つの研修会を行っています。一つは秋の移動研修会、近畿・東海圏へ赴き、旧跡を巡るなどのフィールドワークを中心とした内容です。もう一つは冬の一泊研修会、金沢別院・教務所を会場に学年混合座談を行い一年間の学びを深めます。



仏教伝来の地(奈良県桜井市にて)

移動研修会

テーマ 「親鸞聖人が「和国の教主聖徳皇」と

謳われた聖徳太子とその時代を訪ねる」

行 先 「奈良県明日香村周辺」

期 間 二〇二三年九月九日(土)～十日(日)

本年は学院生・指導総計四六名の参加を得て、奈良県へ赴いた。初日はまず、仏教伝来の地に足を運び、学院長から本研修会の基調講義を得た。その後訪れた安倍文殊院では、日本三文殊に数えられる最大の文殊菩薩像(渡海文殊群像)に多くの学院生が圧倒されていた。また、境内には特別史跡の西古墳があり、石造りの古墳に実際に入ることが可能だった。引き続き行った土舞台周辺のフィールドワークで、聖徳太子ゆかりの史跡を巡り初日の研修を終えた。二日目は飛鳥寺や蘇我入鹿首塚などに行き、学院長による日本に仏教が伝来したころの世相・状況の解説と合わせ、各人、皇太子聖徳奉讃に謳われる「聖徳太子像」に思いを巡らせた。

一泊研修会

テーマ 「浄土真宗を生きる人にあう

ー共に生きるということー」

講 師 兪漢子(ユ・ヨンジャ)氏

(修練道場課題別講師・

新潟教区第3組安専寺所属)

期 間 二〇二四年二月一七日(土)～

一八日(日)

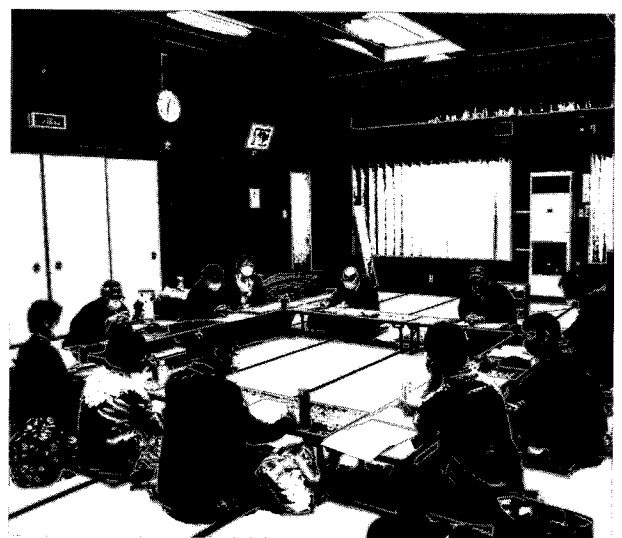
真宗大谷派教師資格取得を目指すものとして、またそれ以前に教えを聞くもの「浄土真宗を生きる」とはどのようなことか、講師の体験談を通し、座談で深め合った。学年混合座談では四班に分かれ、指導をファシリテーターとしながら、学院生が積極的に発言をしていた。初日の日程終了後は講師を囲んでの懇親会を行った。参加した学院生からは、先輩・後輩と寝食を共にする今回の会はとて新鮮で学生時代を思い出したとの感想も得られた。



全体講義の様子



座談総括の報告会の様子



班別座談の様子

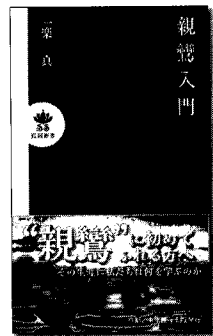
本の紹介

①親鸞入門

著書 一楽 真

定価 九六八円(税込み)

八五〇年の昔、この日本に生まれた浄土真宗の宗祖・親鸞。その生涯における重要な事績を辿りながら、私たちが人生において何を本当に問題とし、何を抛り所として生きるのかを尋ねます。親鸞の生涯、そして浄土真宗の教えに初めてふれようとする方にも最適な入門の書です。

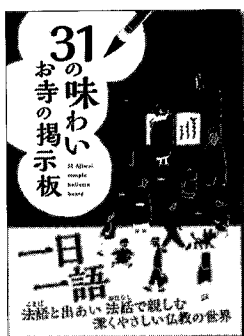


②31の味わい お寺の掲示板

著者 和田稠ほか三十名

定価 九三五円(税込み)

本書は、仏さまの教えをひと言で表した法語と、そのことを僧侶が短くやさしい文章で語ったお話を集めた三十一篇の法話集です。お経の中の言葉から、親鸞聖人の言葉、近代の僧侶の言葉まで、古くから人びとの生きる勇気となり、人生に深い問いを投げかけてきた言葉たちとの出会いが、あなたを待っています。



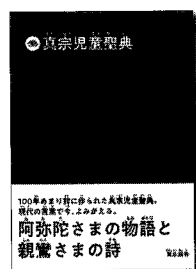
③真宗児童聖典

制作 青少年センター

(真宗児童聖典プロジェクト)

定価 一、一〇〇円(税込み)

仏教学者の大河内了悟氏が編纂者となった真宗大谷派社会課機関誌『児童と宗教』に連載された「真宗児童聖典私考」をもとに書籍化しました。『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』、『正信偈』を当時の子どもたちに、そのころを伝えようと語りなおしたものです。連載から約一〇〇年が経つ今、大河内氏の願いを引き継ぎ、現代の子どもたちに伝わるようあらためて言葉を吟味しています。本書をとおして、原典にこめられた「ねがい」にふれてください。

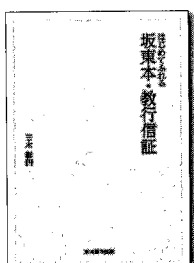


④はじめてふれる坂東本・教行信証

著者 三木 彰円

定価 一、六五〇円(税込み)

本書では、はじめての方にもこの書に込められた聖人のおこころにふれていただけることを願い、



『教行信証』の概要から、自筆本だからこそ窺える「坂東本」のさまざまな特徴を豊富な写真や図を用いて紹介。さらに、『教行信証』における重要な三つの序(総序・別序・後序)の全体を大判写真で公開しています。

編集後記

震動第三十二号をお届けします。巻頭言をご寄稿いただいた大窪指導主任におかれましては、昨年度をもちまして指導をご退任されました。長きにわたり学院運営にご苦勞をいただきましたことあらためて御礼申し上げます。氏の学院生と共に学ぶその一貫した姿勢は、教えに逃げ込んでしまいがちな私たちに「目の前の現実に戻る」スタートラインに立ち続ける歩み」の大切さを教えていただきました。

二〇二三年度は金沢真宗学院の運営はコロナ以前の通常の形態にほぼ戻り、特別講義も全九回にわたって開催されました。また、奈良県明日香村への移動研修会や一泊研修会において、学院の特色でもあるフィールドワークや座談を通して学院生・指導がともに人間としての自己を学びあう貴重な機会を持つことができました。

本年一月一日に発災した能登半島地震で多くの方々が被災されました。衷心よりお見舞いを申し上げます。私たちの思いをはるかに超える現実の厳しさに言葉もございません。しかし私たちの先達の方々がそうであったように、一真宗門徒としてこの火宅無常の世界に身を据えて初心にかえりお念仏の教えを聞思させていただきたいと願うことであります。

細川公英